

# 失敗しない効果的な e ポートフォリオの活用法 ～ e ポートフォリオシステムの導入に際して～

森本 康彦  
東京学芸大学

概要：現在、e ポートフォリオの概念が注目を浴びているが、本稿ではその背景となる教育理論の変遷と、e ポートフォリオ実践のための考え方のついてご説明致します。

キーワード：e ポートフォリオ、構成主義

教育の質向上・質保証、あるいは学生の質向上・質保証が求められるようになり、e ポートフォリオの概念が注目され、導入が始まっている。

この背景には、学習・評価理論のパラダイム変換が強く関係している。1960 年頃から 1970 年代にかけの行動主義、認知主義（情報処理アプローチ）の時代には、教師が学習者に対して絶対的な知識を伝達するための暗記中心の学習指導（学校化された学習）が求められていた。また、評価方法としては主に客観的能力測定法であるテストが用いられ、その結果のみが重視された。

しかし、1980 年代に入り、絶対的な知識観が崩壊し、学習活動や課題、評価方法等が現実的なものでなくてはならないという「真正な学習・真正な評価」が求められるようになった。この構成主義では、知識は学習者自らが構成するものであると捉え、学習活動のプロセスを通じた継続的な学習成果物や学習履歴データ等の記録（学習の証拠）を重視し、これらを用いて学習者のパフォーマンスを評価する。この際に、学習の証拠となるものがポートフォリオである。ここでポートフォリオは「学習、スキル、実績を実証するための成果を、ある目的のもと、組織化/構造化しまとめた収集物」と定義され、開発のプロセスと継続的なリフレクションが重要とされた。

真正な学習・真正な評価では、評価は学習の一部として埋め込まれたものであり、学習と評価は切り離すことはできない。すなわち「評価」自体が「学習」そのものであると捉えられ、ポートフォリオは客観テストの代わりにの結果としてのレポートではなく、単に成果を貯めただけのものでもない。それは、学習成果だけでなく、学習活動のプロセスをも対象として収集されなければならない。

e ポートフォリオに関する活動を表 1 に示す。最も重要なものが評価活動（アセスメン

ト）である。自己評価は、反省や振り返りにより、メタ認知を中心とした自己追求の姿勢を育てることであり、これこそが評価と学習の一体化である。相互評価は、他の学習者の学習成果を通じて本人の内省を促すものであり、教師評価は本人の内省を支援するファシリテータの役割を担うのである。

表 1 ポートフォリオ活動

ポートフォリオ開発	
ゴール設定	
ルーブリックの作成・確認	
ポートフォリオの精選（セレクション）	
評価活動	自己評価（セルフ・アセスメント）
	相互評価（ピア・アセスメント）
	他者評価・教師評価

従来の紙ベースのポートフォリオには、作成したものの編集・統合がしにくい、音声や動画に対応できない、保管場所が必要、検索が困難、経年劣化が起きる、などの問題点が存在した。e ポートフォリオは、これら問題点を解決するものとして登場したと言われがちであるが、しかし、本質的な問題点は、相互評価を中心とした評価活動のやりにくさであった。e ポートフォリオでは、ネットワークを通していつでもどこからでも相互評価等の評価活動を行うことが可能になるため、リフレクションの機会が劇的に増えることが期待されている。

e ポートフォリオは、学習の実践の中で、学習成果物、テストデータ、資格・学歴等の履歴など様々な姿形で存在している。しかし、e ポートフォリオのための必須要件は、以下の 4 つにまとめることができる。

1. 学習の証拠としての役割を担う。
2. 学習者のパフォーマンスを評価する。
3. アセスメントを通してリフレクション

の誘発, 自律的な学習が生起される。

4. 相互作業が促進される (コミュニティの構築・促進)。

しかし、eポートフォリオは万能のシステムではなく、eポートフォリオの共通理解と教育プロセスを通じた継続的な適用と運用の工夫が必須である。

#### 注記

本原稿は2010年6月24日のCAUA FORUM 2010での講演を、CAUA事務局が文書に纏めたものです。